



吉村正先生を偲んで

吉村医院 院長 田中 寧子

私と吉村先生との出会いは、15年前の東京で開催された自然分娩を志す医療者の会でした。当時、私自身が妊婦だったこともあり何気なく参加しました。「ここには自然なお産の記念碑が建つぞ!」と吉村先生はワッハッハと豪快に笑いながらも感極まっておられる様子でした。

吉村先生は「現代におけるヒト生殖の終焉について」を自身の研究テーマとされており、その危機的問題に情熱的に取り組むお姿に私は感化され、弟子入りしたいと思ったのです。その数か月後も、「出産と人間性について」の講演会に赴き、その時に映し出されたお産の写真と吉村先生の娘さんの歌声もあいまって、私は感動して泣いてしまったことを覚えています。

それから3年後の2007年に、吉村医院を初めて訪れ、一晩のみの研修でしたが、お産に立ち合わせて頂くことが出来ました。畳の部屋、布団の上で、幾度かの陣痛ののち、産まれたばかりの我が子を胸に抱く母、感激のあまり泣いている父、そして介助した助産婦を静かに見守る吉村先生がおられました。それから数時間後、朝5時に医院の玄関に来るように言われました。先生は、寝不足ながらも静かに慎重に車を運転され、同行していた私の母と3歳の息子も一緒に幸田町の里山へ連れて下さいました。そこで、日が昇る瞬間とその光景を端的に案内して下さいました。それが私の吉村医院での幕開けでした。

その2年後、導かれるように岡崎に来て、夢中の9年が過ぎました。先日、当院へ通う妊婦さんたちと岡崎市の中央総合公園に行きました。40年前に吉村先生が始められた「妊婦ピクニック」です。岡崎を一望できる展望台(写真1)からの下山途中、「やはり自



然の中はいいですね。」と隣で黙々と歩いていた妊婦さんに話かけられ、「本当にそうですね。」と共感しました。吉村先生は「自然こそ真実!」と教えて下さいましたが、そのことをじっくりと咀嚼する日々です。

吉村先生は、50年かけ2万人のお産に立ち会ってこられました。当初、最新医療でお産を管理してこられました。しかし、多くのお産に立ち会う中、予防医学的取り組みをすると、医療介入を最小に抑えることができ、その自然なお産がより幸せなお産として実践してゆかれました。

「命を懸けて本当の母親になりなさい。」「やりたいようにやりなさい。」「夢中で動いて動物になりなさい。」「あと二週間がんばってみなさい。」などとたく優しい声で、時に大笑いしながら妊婦さんを叱咤激励されていました。

そして、一旦陣痛が始まると、どんなにリスクの低いお産でも何度も何度も「どうですか?」「心音はいいですか?」と助産婦に確認し、慎重に細やかに診ておられました。時間のかかるお産の時は、数時間ごとに行き来する先生の作務衣姿、夜中に鉄扉の閉まる音、パタパタと足早に響く雪駄の音が思い出されます。「人事を尽くして天命を待つ」真剣さそのものでした。

院長職を引き継がせて頂き、4年が経過しました。先日の産後1カ月健診で、「今回二人目を産んで、かわいくて、かわいくて、上の子もより一層かわいくて、やっぱり3人目が欲しくなりました。」と話された方がいます。2年前、予定日超過の43週で自然分娩をされて、今回も



2週間を過ぎてのお産でした。この方のお母さんも20年前の吉村医院で、予定日超過のお産を含め3人をご安産されてきました。この度のお産も、吉村先生が命がけて培われた安産してゆく文化と土壌での結実でした。(写真2:産後の母子同床, 写真3:産後一か月健診)



私は日々、「嬉しい」繁殖に立ち合わせて頂いています。その影響でしょうか、私も今年44歳で第2子を授かりお産をしました。院長職を担う中、当院の職員に

大いに頼り、吉村先生を慕う全国の医師からの応援があり、また地域の先生方や病院にご支援を頂いたお陰様の展開でした。産まれた女の子は、なぜだか自分自身の子というより、吉村医院という豊かな村に、自ずから現れたという感じがしています。(写真4) この有難い恵を糧に、自分なりにご恩返しして参ります。



師匠の吉村正先生、愛しき日々を下さり誠に有難うございます。これからも末永くご教授頂くと共に、心よりご冥福をお祈り致します。

岡崎市医師会の皆様、今後とも何卒宜しく願い申し上げます。
平成29年師走